混合交通を観察する
DOCUMENT Eye
●series—187

●高速道路のサービスエリアでの親子の行動を観察する

高速道路のサービスエリアで一人歩きする子ども123人中55人

●観察場所／山梨県上野原市・中央高速道路下り線「談合坂サービスエリア」
●観察日／8月9日（火曜日）
●天候／くもり
●観察時間／10:40 ～11:40（1時間）
●観察者／5名

●WHY 駐車場で子どもの安全は守られているか？

高速道路上には、休憩施設として約15kmごとにパーキングエリアが、約50kmごとにサービスエリアが設けられている。

休日ともなると、行楽などで子どもを乗せた親子連れの車両が増える。常にクルマが出入りしているサービスエリアの広大な駐車場で駐車した場所からトイレや売店などへ歩いて移動する際には、歩行者は前後左右の安全確認が不可欠となる。特に子どもは体が小さいため、クルマが並ぶ駐車場ではドライバーから認識されにくく、親が安全を確保する必要がある。

夏休みで行楽や帰省客も増えはじめた8月上旬、高速道路のサービスエリアで小さな子どもを乗せたクルマを対象に、子どもの降車の仕方と駐車場を通行中の子どもたちの様子を観察した。

子どもを降車させた後、両手で子どもと手をつなぐ親

●●WATCHING 年齢が高くなるにつれ一人歩きが増える

観察場所は中央高速道路下り線「談合坂サービスエリア」。観光地に向かうと思われる家族も多かった。降車時および駐車場を通行中に親が子どもと手をつなぐ等、安全を確保しているかについて観察した。

観察の結果、降車時に親が先に降りたのは、9歳までと思われる子ども123人中106人（86%）。多くの場合、停車後に親が先に降りて、別のドアから子どもを降車させていた。6歳以下と思われる子どもの場合は、親がベビーシートまたはチャイルドシートから子どもを降ろす例が多く、全員が親より後に降車していた。一方、7～9歳と思われる子どもの場合はジュニアシートはあまり使用しておらず、70人中53人が親が先に降車、17人が子どもが先に降車していた。しかし、停車と同時に一目散に駆け出すといった光景は見られなかった。ほとんどの場合、親が子どもに注意を促していたようで、助手席側に全員が集合、家族全員で駐車車両の間を抜けて売店やトイレへと向かう例が多かった。

写真上／父親が手をつないで通行する姿も多かった
写真下／親が荷物の整理をしている間に遊びだしてしまう子ども

駐車場を通行する際、6歳以下と思われる子どものほとんどは親が抱くか、手をつないでおり、祖父や祖母が孫の手を引いていた例も多かった。7～9歳と思われる子どもは一人歩きが多かったが、通行中は親からあまり離れずにゆっくりと歩く姿が観察された。

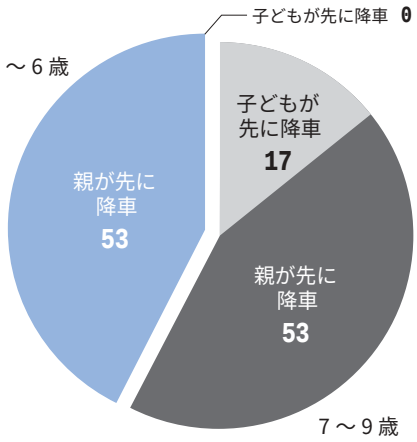
●●●PROPOSE 駐車場では親が子どもの安全を確保することが必要

観察中、多くの親は自分の子どもと手をつないだり、声をかけたり、手を伸ばせば届く範囲で子どもたちをガードしていたのが印象的だ。一方で、子どもが降車した後も荷物を降ろすなど10～20秒ほどではあるが、子どもから目を離してしまっていた親も多かった。一瞬とはいえ、その間にも子どもは興味のあるものを見つけるとすぐに動き回ってしまう。高速道路のサービスエリアでは、まわりのクルマはいつ動き出すかわからない。手をつなぐなどして、子どもの動きに注意してほしい。

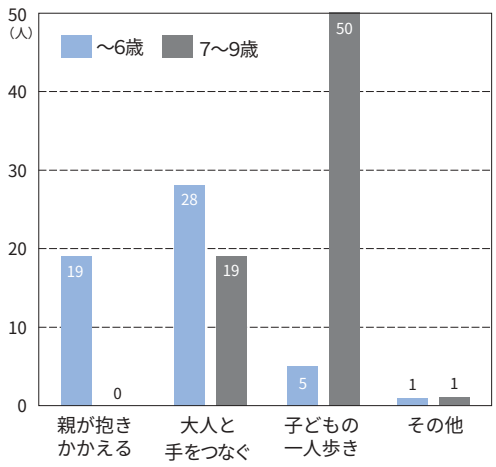
また、サービスエリアが混雑していると、駐車スペースを捜しながら走行しているドライバーは、歩行者への注意が散漫になっている場合もある。子どもは体が小さいのでドライバーからはさらに見えにくい。人とクルマが頻繁に行き交う高速道路のサービスエリアでは、歩行者、とりわけ子どもの安全確保に努めてほしい。

写真上／兄弟で手をつないで通行する子ども
写真下／父親、母親が一人ずつ子どもと手をつなぐ

●サービスエリアでの降車の仕方（総数123人）



●サービスエリアでの子どもの通行の仕方（総数123人）



※年齢の判断は観察者の見解による　※その他の2名は兄弟同士で手をつないで通行